



エッセイ

アメリカで生きる「子どもの世界」と言葉

山崎 遼子*

©2014. 「移動する子どもたち」研究会. <http://www.gsjal.jp/childforum/>

「おとぎ話のような 素敵なこの世界は 虹の橋をわたって行く 子どもの世界
素敵な世界 素敵な世界 素敵な世界 子どもの世界」¹

子どもの世界。子どもの世界がどんなものか、どんな雰囲気か、どんな色をしているか、一言では言い表せない。けれど、子どもの世界はある。

私は土曜日にだけ、子どもたちに会う。すると、子どもの世界に触れることができる。日本にルーツを持つ、今をアメリカで生きる子どもたちの世界である。その世界で生きる感覚は、日本で生きる子どもたちの世界で生きる感覚と違うのだろうか。——この答えは、究極のところ、子どもの世界に生きる子どもたちにしかわからないと思う。しかし、その世界に触れる大人として、その一側面に解釈を加えることはできる。

ある日、私が教えていた5年生の教室でこんな出来事があった。つばさくん（仮名）は、比較的静かな男の子。休み時間も、他の子に誘われてもあまり一緒に遊ばず、本をよく読んでいます。発言もそれほど多くない。

私が漢字テストを返却していたときのこと。この漢字テストで、つばさくんは、102点満点が取れたと自負していたようだった。102点ではなかったことを知ると、つばさくんが、間髪いれず「Oh My God (オーマイゴッド)！」と普段出さないかなりの大声で叫んだのだ。

* ポートランド日本人学校（補習授業校）

¹ 「It's a small world」日本語対訳（小野崎 孝）：「子どもの世界」

...。

一瞬、クラスがシーンとして、その後、大爆笑が起こる。

私も、大笑いしてしまった。

このクラスで、この出来事が大笑いを巻き起こすほど可笑しく感じられたのには理由がある。私のクラスでは「日本語を話す」ということをクラスのルールとして決め、実行してきたのだ。だから、子どもたちは普段、休み時間などでも、英語を話すクラスメートを見つけると、大騒ぎして私に報告してくる。

けれど、この、つばさくんの「Oh My God!」には、何かそのルールを打ち破る、言葉の強さがあった。テストを返されるという文脈において、現地校で体得した言葉がふっと、本当に自然な表現として彼から発せられたのだ。

つばさくんの、その発言の直後、クラスが静まり返って爆笑が起こる前の数秒間に、私は(数人の)子どもたちの視線が私に向けられているのを感じた。それは、今ここで「日本語を話す」というルールが大人によってどのように扱われるか、ということの判断を待っている視線だったと思う。

今思えば、あの時、「日本語で話しましょう」という、教室を運営する「教師」としての発言もできたのかもしれない。しかし、あの瞬間は、言葉を楽しむ一人の人間として、そのあまりにも自然に起きた出来事に向き合うより、私には他に選択肢が浮かばなかった。だから、心からその出来事を楽しんだし、笑った。それにより、子どもたちの笑い声が増幅するのを大人心に感じた。

この出来事は、私にとっても、子どもたちにとっても、何らかの意味をもたらした。私には、「再確認」がもたらされた。教室で表面に現れる言葉は、本当に氷山の一角でしかなく、子どもたちの中には様々な思いと言葉が錯綜し、存在し、動いているということ。そして、その言葉は、必ずしも日本語ではないかもしれないということ。そして、「日本語で話そう」というルールが外からの刺激として、その子どもの内側と接触しながら存在している。こういったことの「再確認」。

子どもたちにとっては、つばさくんという存在が肯定的に認められた瞬間だったのではないだろうか。そして、思った通りに物事が進まなかったときに「Oh My God!」と叫ぶということに関する共通認識、現地校と補習校両方に通う者同士としての認め合いがそこにはあったのではないか。「そうそう、そうだよね」という子どもたちの心の声が聞こえた気がした。そこには、「Oh My God!」という言葉を通して、ある種の心の通い合いがあったのではないかと思う。

子どもの世界は、ある一人の子どもが今ここにおいて、そこで何かをして、そこで何かを言う。それだけでもう成り立っている。しかし、周りの子どもがそれに反応して、何かを言ったり、何かをすることにより、多層的になり、より豊かな世界が造られている。特に、私の

クラスの子どもたちは、英語、日本語と必然的に向き合うという世界に生きている。だからこそ、その今生きる世界で考えや言語を交錯させ、多層的に経験していくことに大きな意味がありそうだと感じる。

「おとぎ話のような 素敵 な世界 子どもの世界」。子どもの世界で、子どもたちは迷い、言葉に躓くこともある。けれど、他者との交流の中で上のような様々なエピソードを経験し、世界を解釈し、色を塗り、築いていく。そこにまた、言葉がある。おとぎ話のように、土曜日に毎回ストーリーは完結しないけれど。そんな多層的で豊かな子どもの世界が私には「素敵」に写る。だから、私も迷い、躓きながらも、解釈を続けて歩いていく。

私が触れられる子どもの世界は、子どもの世界のたった一面だけ。あの「素敵」な世界に生きれるのは、アメリカにいても、日本にいても、子どもだけなんだ、といつも確認させられる私の土曜日。